

B子さんは、明るいのが取り得の元気な人だ。久しぶりに会おうものなら、天にも届くような大声で、「えんちょうせんせいー、こんにちわー、げんきー！うれしいなー、えんちょうせんせいにーあえてー、アハハハハー」ってな具合である。そして、このハイテンションの大声は、決して止まることがない。私の顔が見えなくなるまで、私の返答とは関係なく続くのである。

明るく、元気なことは決して悪いことじゃない。しかし、彼女の家族背景や入所理由を良く知る私たちにとって、この必要以上の彼女の明るさは、妙な違和感を持って迎えられていた。決して明るく元気に生きてこられるような成育暦の持ち主ではないのである。

この明るさを、知的障害者だから、自閉症者だから、苦勞も苦勞と分からずに生きて来たんだらうと理解するのは簡単だ（己の無知を省みずに）。でも、それは大きな間違いだ。ここでは、その明るさを「明るく振る舞っている」そして、「寂しさや苦しさを隠すため明るくしている」と考えるのが、通常の人間理解の方法だらう。

彼女とのおつき合いが進むに連れ、このおしゃべりが止まらなくなる場所と時間があることが判明してきたのである。それは、多くの人が集まる行事と食堂だった。行事では特に開会式、そして食事場面では、その食事スピードが極端に遅い時だ。気がついてみれば簡単なことなのだが、彼女の明るさと元気さの前で、私たちの観察眼は曇っていたのである。彼女は、いかにも楽しそうに行事に参加もし、食堂にも、さもうれしそうに移動していたのだから。

行事の開会式と食堂、ともに多くの人

間が集い、パーソナルスペースが極端に縮まり、視覚的な刺激も、聴覚的な刺激も洪水の如く押し寄せる場所だ。おそらく彼女たち自閉症の方々には苦痛に満ちた空間だらう。また、開会式も食堂も様々なルールに縛られた時間と場所だ。「きちんと並びなさい」「残しちゃいけませんよ」と過剰な心理的負担が押し寄せる。その苦しいであろう場所で、B子さんは、明るく振る舞っているというわけだ。

そこで、私たちは、彼女に一つの提案をした。「居室で一人で食事をしてみないか」と。

苦しい場所には、必要以上の努力をして、参加する必要は無いんだよと、今までの人生でして来たとしてつもない努力を労いながら、それに気がつかなかった専門性の低さを謝罪した。

驚いたことに、彼女は初日から、穏やかに食事をし、しかも嫌いなものをいとも簡単に残すこともできて、順調なスタートを切ったのである。

それから数ヶ月後、彼女には、おしゃべり過ぎの時間が無くなっている。明るく元気過ぎる彼女の姿はもうないのだ。彼女はあるがままの自分を受け入れ始めているに違いない。

【解説】

イギリス自閉症会が発表している自閉症支援の骨格を示している概念に【SPELL】がある。S-Structure（構造化）から始まる支援の5本柱のLはLow arousal（低刺激）である。情報処理能力、特にワーキングメモリーの機能に不全が仮定される自閉症者にとって、その情報処理能力に負荷をかけない低刺激な環境は、情報処理能力に余剰を生じさせ、それが安全と安心のベースを作ると考えることができる。